

# ワクチンについて

## ☆ 混合ワクチンの接種時期と回数

最初のワクチン接種時期と回数については、諸説あり悩むところですが、当方では下記の通り理解し接種を致します。

産れたばかりの子犬は、免疫システムが未発達で、自分で免疫抗体を作ることが出来ません。しかし、母犬の母乳に含まれる移行抗体という免疫抗体によりさまざまな病気から守られることになります。授乳中はこの移行抗体により守られていますが、離乳すると約2週間で減少し始めます。また、子犬が2か月くらいになると自分自身でも免疫抗体を作れるようになってきますが、移行抗体も徐々に減少するため、感染症に対する耐性が低くなってきます。そこで、必要になってくるのが、感染症に対する免疫抗体を作成するワクチン接種です。

ここで、時期についての問題が発生します。

移行抗体が大量に残っているうちは、ワクチンを打ってもバウンドし抗体を作ることが出来ません。移行抗体はいつ切れるか正確には分からないのですが、血液検査をすることで確認する事もできますが、切れるであろう時期(生後2か月)に1回目のワクチンを接種し、その1か月後に2回目を接種する事で確実に免疫抗体を作ることになるが出来ると理解しています。

この2回目の接種による免疫力は、約1年で効果が減少するといわれています。

なので、その後は1年に1回のワクチン接種が理想とされています。

## ☆ ワクチンの種類

ワクチンには、「生ワクチン」と「不活化ワクチン」の2種類があります。

生ワクチンとは…生きているウィルスを使用しているワクチンです。

弱毒株と言われる弱いウィルスで、ワクチン接種時に体内に入ると増殖し非常に軽く病気に感染したのと同じ状態になり、抗体ができ、非常に強力な免疫力が付き、持続性があると言われています。

しかし、生きたウィルスを使っているため、体調が悪く弱っている時などは、その病気を発症してしまう可能性があります。

混合ワクチンはこのタイプです。

不活化ワクチンとは…死滅したウィルスを材料にしているので接種後の増殖はありません。

そのため、生ワクチンに比べると免疫力が弱く、持続力も劣ります。

しかし、その病原体による症状が現れることはほとんどありません。

狂犬病のワクチンはこのタイプです。

混合ワクチンの種類は対象ウィルスの数によって種別されます。

お住まいの地域により発生状況等考慮し、種類については判断します。

☆ 狂犬病ワクチンについて

- 狂犬病は人畜共通感染症の最悪な感染症です。発症すると必ず死亡する伝染病です。
- 狂犬病予防法により、ワクチン接種が法律で**義務**付けられています。
- 犬を飼い始めてから30日以内に1回。その後も毎年1回のワクチン接種を受けます。

☆ 感染症とは

- 病原体となる微生物が、体の中に入り込み増殖していくことを《感染》と言います。
- 感染したことによって、体の働きや仕組みに障害がおこることを《発症》と言います。

☆ 感染経路について

- 主な感染経路は3つ

- **【空気感染】** 咳やくしゃみなどで、空気中にばらまかれたウイルスや細菌を吸い込むことにより感染
- **【母子感染】** 子犬が母犬のお腹にいる時に胎盤を通じて感染するものや、生まれてくる時に産道で感染するもの、母乳を飲むことによって感染するものなど。
- **【経口感染】** ウイルスや細菌の付いてる物をなめたり食べたりすることにより感染

☆ 混合ワクチンについては強制されるものではありません。しかし、大事な命です。

- 予防できる物であるなら予防をし、人も犬も幸せに暮らしたいですね！